

シンポジウム：「創られる他者性：他者を語り出すジェンダー・イメージ」 大貫 敦子

2月25日～27日、日本ドイツ学会、ドイツ・日本研究所、関西ドイツ文化センターの共催でシンポジウム「創られる他者性：他者を語り出すジェンダー・イメージ」が開かれた。文化的な異質性は往々にしてジェンダー・イメージを使って語られる。いやそのようにジェンダー・イメージが語られることによって「他者」は創られていく。この問題を専門領域の枠を越えて考えようという趣旨で、中国研究、日本研究、ゲルマニスティク、美術史、教育学などの分野からの発表者を得て、3日間にわたり充実した議論を展開することができた。

25日はG.ノイマン（ミュンヘン大学、ゲルマニスティク）の基調講演「ジェンダーの差異、文化の差異：記号論的な含意と文学作品への現れ」で始まった。ノイマン氏は、文学テキストにおける他者性の構築の分析に関して文化人類学的な視点を導入することを提案した。これに対しては文化人類学をあまりにも無批判的に過信していないかという疑問がディスカッションであがった。

26日午前のテーマは「他者性とジェンダー・イメージ」。H.ゲスマン（トリア大学、日本学）の発表は「救済者としての他者：映画「舞姫」と「日本人は最高の恋人」を中心として」というテーマで、両映画に登場する日本人男性像の特徴として窮地を救う助っ人のような役割であるとした。ただし、こうした見方自体が、紋切り型の日本像に捕らわれていないかという疑問があった。K.ゲルニヒ（ベルリン自由大学、Kulturwissenschaft）の発表は、「ヨーロッパにおけるジャポニズム」を、ピエール・ロティとマックス・ダウテンダイの比較から、エロティシズムとエクソティシズムの微妙な関わり合いを問題とした。26日午後のテーマは「身体の他者性」。M.ユエ（ハワイ大学、中国学）の発表は「我々の内

なる他者の身体」というテーマで、現代中国の女性の文学に見られる妊娠・中絶といった身体性の表現をアブジェクション論から分析し、そこに女性の創造力を見ようとするもの。G. ブラントシュテッター（ジェンダー・スタディーズ、ゲルマニスティク）の発表はパフォーマンスに見られる身体の脱構築をテーマとしたもので、身体のデフォルメされた演出が、身体に付与されたジェンダー・イメージを解体し、内部・外部、女性・男性、自然・技巧という二元論的な思考をも乗り越えていく試みであるという見解を示した。

27日は「創られた他者性と文化的支配」のテーマで、文化のヘゲモニーに利用される他者性とジェンダー・イメージの問題をあつかった。キム・ヘシン（学習院大学非常勤、韓国・日本の近・現代美術）は「強制された同一性と他者性の剥奪」というテーマで、日本の植民地下における韓国美術に見られるジェンダー・イメージの分析から、いかに日本の文化政策が韓国を「女性化」することで支配の強化を行ったかを総督府主催の美術展の歴史と作品にそって発表した。タック・スンミ（漢陽大学、ゲルマニスティク）は1930年代の韓国に見られたモダン・ガール現象を分析し、都市化やモダニズム文化の流入で「新しい女性」としてモダン・ガールが登場するが、それは韓国内部では男性に搾取される女性の実体を表面的に隠蔽する一見華やかなファサードにすぎず、また対日本との関係では韓国の男性も含めて被支配者の立場に置かれていた。この権力構造の二重性のなかで女性のジェンダーは創られていく。そして女性もそのイメージに同一化してしまうのである。権力による女性性の創出に関してさらに、佐藤秀夫（日本大学、教育学）は「制服が創りだす女学生」というテーマでの発表。明治から現在にいたるまでの日本の女子生徒の制服の変遷のなかで、いかに女性像を都合のいいように創り変えてきたか。佐藤氏の語るその歴史は、権力装置の滑稽さと強大さを物語っている。

もっとも議論が白熱したのは、文化とジェンダーを語るディスコースと文化的ヘゲモニーの問題だった。特に3日目のテーマは、西洋に負い目を感じつつも韓国に対する植民地支配では文化的優位性を主張した日本の過去をめぐる問題であり、ジェンダー・イメージが日本のアンビヴァレントな立場をいかに隠蔽しつつ、同時に日本の文化的・政治的ヘゲモニーをねつ造するのに手を貸した事実を直視しなければ、日本のドイツ研究も意味がないことを痛感させるものだった。特にキム・ヘシンさんは「いったん周縁という位置づけをされた地域は、＜脱構築＞や＜ポスト構造主義＞などの西洋・男性中心主義を批判する議論でさえ、後追いをする立場におかれてしまう。＜中心＞の言葉を学ばなければ、一緒に議論の場に入れられないという非対等性があることは否定しがたい」と発言していたが、まさにこの非対等性を感じ取る感覚が欠如したままで観念的に＜脱構築＞をしているような文化論が幅をきかせているのは事実である。「他者の尊重」を一応は唱えながら実際には他者を排除・無視していることに気づかない「良心的(?)」鈍感な連中には是非聞いてもらいたい言葉だった。